

IV 複式学習指導 Q & A

Q 1. 初めて複式学級の担任になったとき、どのように教育活動に取り組んでいけばよいですか？

複式学級には、少人数で編制されていることから、個に応じた指導がしやすかったり、直接指導できないときに児童に自ら学ぶ力を身に付けさせたりすることができるなど、一人一人を生かす教育の原点がある。

複式学級の指導の難しさや課題はあるものの、複式学級だからできることを見つめ、前向きな構えで児童と向き合っていくことが大切である。

Q 2. 複式学級の長所や短所は、どのようなところですか？

複式学級の特性から生まれる長所と短所として、次のようなことが挙げられる。

複式学級の特性	長 所	短 所
少人数で構成されている。	<ul style="list-style-type: none"> 一人一人の学習状況を十分把握することができ、学習の個別化が図りやすい。 一人一人とじっくり向き合えて、関わりを深めることができる。 主体的に取り組む問題解決的な活動を展開しやすい。 全員に発言や発表の機会をもちやすく、表現力を付けやすい。 一人の考えや意見をしっかり受け入れ、取り上げることができる。 全員で何か一つの活動をするのができやすく、まとまりやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> 人間関係が固定化され、閉鎖的になりやすい。 刺激が少なく、向上心を育てにくい。 教員が児童に手をかけすぎてしまう。 多人数の中で気後れしてしまうおそれがある。 多くの考えや意見が出にくく、広がりや深まりが見られにくい。 合奏や集団競技など、人数を要する活動を行いにくい。
2 学年以上児童が学級にいる。	<ul style="list-style-type: none"> 上学年は下学年に分かりやすく教えようとし、下学年はその姿から学ぼうとする。 上学年としての自覚が生まれ、児童を成長させる。 自ら「学ばなければ」「学ぼう」という構えができやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> 上学年が威圧的になったり、下学年が甘えたり萎縮したりしてしまうことがある。 学年の逆転現象が起きるおそれがある。

長所と短所は表裏一体のものである。複式学級のよさに目を向け、よさを最大限活用するという教員の意識改革が最も大切である。「複式学級だから〇〇になる」というマイナス思考から「複式学級だからこそ〇〇ができる」という発想への転換を図りたい。

Q 3. 複式学級の学習指導の類型には、どのようなものがありますか？

複式学級における学習指導の類型は、大きく二つに分類できる。

学年ごとにそれぞれに別の教科あるいは同じ教科を指導していく学年別指導と、異学年で同じ(領域の)教材を扱いながら各学年の目標を踏まえて行う同単元指導の二つである。学年別指導のよさは、教科の系統性を踏まえた指導や発達段階に応じた指導がしやすい、学級編制に左右されないことなどが挙げられる。課題として、間接指導の工夫や観察・実験・実技、あるいは校外学習などの指導への配慮などが必要となる。同単元指導のよさは、異学年の交流、特に話し合いが活発になり、互いに刺激を与え合うことができることなどである。課題としては、系統性を踏まえた教科では難しいことや学年差に応じた指導や評価の困難さなどが考えられる。

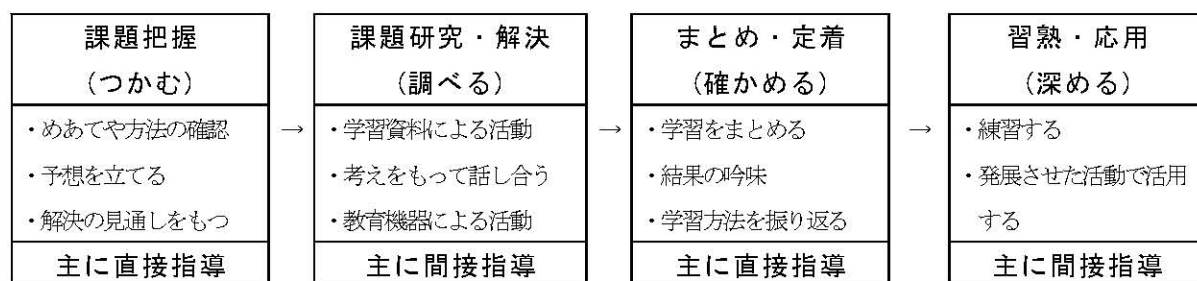
学年別指導は、異教科を指導する場合と同教科を指導する場合が考えられる。同教科で

あっても、異教材なのか類似の教材なのかによって、さらに学習指導の形態も変わってくる。学年合同での同単元同内容の指導形態は、A年度・B年度の2年間で指導計画を立てて指導に当たることになる。

教科等の特性にも関係してくるが、今日では、A年度・B年度方式よりも学年別指導を行う学校が増えてきている。これは、学校の統廃合や児童の転出入が起こった場合に、学習されないままの単元や重複する単元が生まれるおそれがあるからである。安定した学級編制、2年間の計画的な学習指導の保障がない中での、同単元同内容の学習指導は難しい現状がある。大切なのは一人一人にその授業でねらう力を付けることである。授業のねらい、教材・題材の特性、児童の実態などを考慮し、柔軟に指導計画を考えていくことが大切である。

Q4. 1単位時間の学習展開は、どのようにすればよいですか？

課題解決型学習を基に、基本的な学習の流れを次に示す。



学習の効果を高めるためには、直接指導と間接指導の組合せを工夫することが大切になる。

直接指導とは、教員が児童に直接学習内容を指導することで、間接指導とは一方の学年で教員が直接指導をしているとき、児童だけで学習を進めることである。「ずらし」とは、二つの学年の直接指導が重ならないように学習活動をずらすことで、「わたり」とは、直接指導を行うために、移動する教員の動きのことである。ここに示したものは、4分割案として最も基本的なものである。

4分割案の中にも様々な組合せがあり、また、教員の動きも直接・間接だけでなく、同時間接指導の時間を設け、個別指導



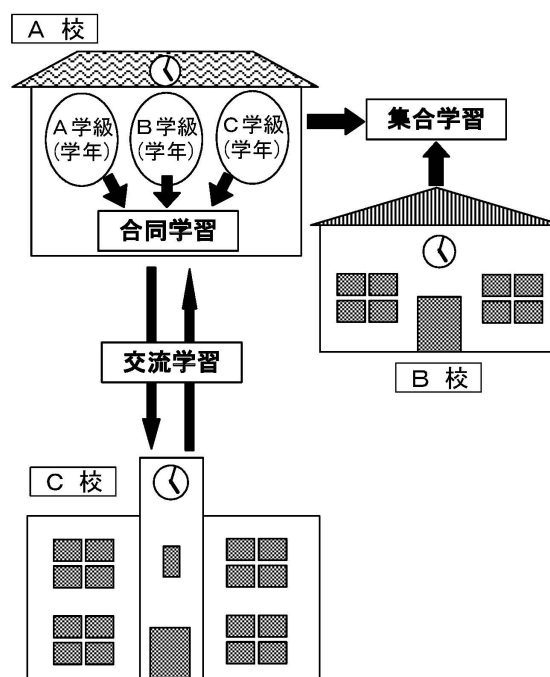
導を確保することも可能である。その他、2分割案（前半と後半に分けて指導する）、無分割案（1学年だけを指導する）なども考えられる。

※1単位時間の学習展開は、固定的に考えることなく、学習内容や児童の実態に応じて柔軟に考えることが大切である。

Q5. 協働的な学習を活性化させるために、どのようなことが考えられますか？

小規模学校においては、多人数による話し合い活動など、協働的な学習活動を行いにくい。このデメリットを克服するために、異学年あるいは他の学校と連携した教育活動を計画的に行うことが考えられる。

例えば、学級や学年の枠をはずした学習集団を編成して学習する「合同学習」が挙げられる。小人数学級、特に、極少数の学級において、多人数で活動する経験は貴重であり、普段の学習環境では行いにくい学習活動が可能になる。例えば、体育科のボールゲームや音楽科の合唱・合奏などが考えられる。また、近隣の複数校の同学年の児童、または全校児童が集まって、各学校の教員が協力して学習指導する「集合学習」や、学校規模や生活環境が異なる学校間で交流しながら学習する「交流学習」もある。



協働的な学習を実施することによって、各教科等の学習目標が効果的に実現できるように、学習計画を立てるに当たっては、共通のねらい及び各学年のねらいを明確にすることが大切である。また、回数や期日、活動内容や流れ、役割分担、集合場所や移動手段など、具体的な動きをイメージしながら互いに確認する。その後、それぞれの学校、学級で事前学習を行い、活動後には計画や指導方法を振り返り、次年度に生かすようにする。できるだけ文書に残し、引継ぎが確実にできるようにすることも大切である。

他の学校と連携した協働学習として、電子メールの交換やホームページの閲覧、テレビ会議システムなどのICTを活用した学習活動も考えられる。それぞれの学校や地域の実態や設備の状況から相手校を選択し、互いに学習の交流を行うことは、児童生徒の関心・意欲を高める上でも効果的である。

課題としては、事前の打合せの時間がとりにくいこと、活動に係る費用を捻出する必要があること、安全面の確保や移動に時間がかかることなどが考えられる。



十津川村立西川第二小学校と田辺市立宮里小学校との交流学習



山添村立やまぞえ小学校と上北山村立上北山小学校におけるテレビ会議システムを活用した交流学習

Q6. 学習指導案は、どのように作成すればよいですか？

学習指導案の作成と留意点（p10参照）を参考に、学習指導案を作成する。展開例については、p6学年別指導、p7同単元指導を参考にするとよい。

第◎、●学年 ○○科 学習指導案（例）				
1	単元名	第◎学年 ○○ 第●学年 △△	}	単元名、教材名は学年別に記述する。
	題材名	第◎学年 ▽▽ 第●学年 ◇◇		
2 単元目標 ← 学年別に記述する。				
	第◎学年	<input type="text"/> <input type="text"/>		
	第●学年	<input type="text"/> <input type="text"/>		
<div style="border: 2px solid blue; padding: 5px; display: inline-block; margin: 10px auto; width: 60%;">・単元全体の指導を通じて児童に身に付けさせたい力を、学習指導要領の目標・指導内容及び児童の実態に基づき具体的に記述する。 ・評価の四つの観点（教科によっては、三つあるいは五つの観点）を踏まえ、児童の立場に立って、「～しようとする」「～と考え、判断する」「～できる」「～を理解している」などの表現で記述する。</div>				
3 指導について ← 学年別に記述する。				
○教材観 ← 単元の趣旨（単元の内容、単元を取り上げる意義、今後の展開など）を記述する。				
	第◎学年			
	第●学年			
○児童観 ← 本教科における児童の実態（レディネステスト等を基にするとよい）を記述する。				
	第◎学年			
	第●学年			
○指導観 ← 指導の力点、工夫、形態、その他配慮事項などについて記述する。				
	第◎学年			
	第●学年			

4 単元の評価規準 ← 学年別に記述する。

	ア 関心・意欲・態度	イ 思考・判断・表現	ウ 技能	エ 知識・理解
第○ 学年	①	①	①	①
	②	②	②	②
第● 学年	①	①	①	①
	②	②	②	②

『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料』（国立教育政策研究所）等を参考にする。

5 指導と評価の計画（全○時間） ← 学年別に記述する。

時	第○学年		第●学年	
	ねらい、学習活動	評価規準及び評価方法	ねらい、学習活動	評価規準及び評価方法

6 本時案

① 本時の目標

第○学年

第●学年

② 本時の評価規準

第○学年

第●学年

③ 本時の展開例

学習のねらいを児童の立場で記述する。
教科によっては「小単元名」で記述する。

学年別に記述する。

p 6、7「展開例」、p 9「複式学習指導の流れの例」を参考にして記述する。

アの①
ワークシート等
で確認するなど

【展開例における主な配慮事項】

- 学習活動
 - ・指導過程に沿って、児童の活動を児童の立場で記述する。
 - ・文末表現例として ～に気付く ～考える ～工夫する ～を知る
～を聞く ～を発表する など
- 指導上の留意点
 - ・学習活動を充実させるために必要な指導の手立てについて具体的に記述する。
 - ・文末表現例として ～できるよう、助言する ～できるよう、～する
～について確認する ～を配慮する
～言葉がけをする など

※学習指導案は、それぞれの教員の授業の構想や計画を表したものである。この指導例を参考に工夫して作成する。